



高校野球のマナーとルールを学ぼう (第1回)



財団法人兵庫県高等学校野球連盟審判部

グラウンドでの試合を振り返り、高校野球の大切なマナーとルールを学びましょう。
あなたの「なぜ? どうして?」にわかりやすくお答えしていきます。

マナー編 試合前の挨拶

試合前の整列で相手チームをにらみつけ、威嚇するような声を出して挨拶をするチームに驚いたのですが…。

どんな試合も挨拶で始まり挨拶で終わります。球審の「試合を始めます」の声に合わせて両チームが「お願いします」…。グラウンド全体が引き締まる瞬間です。ところが、いつのころからか礼のタイミングをわざと遅らせたり、挨拶の後に相手を威嚇する大声を出したりするチームを見受けるようになりました。

挨拶の基本については、数年前に全国の高野連で再確認されています。授業の開始や終了時の挨拶とまったく同じ意義があることをしっかり理解してください。

相手チームがいるからこそ試合ができます。互いに尊敬し合うことと正々堂々の緊張感こそがスポーツマンシップでありフェアプレイの原点です。「リスペクト(尊敬)」と「ジャスティス(正義)」はルールブックの精神として光り輝いています。ルールの基本を認識し、守ることがマナーの向上にもつながるのは言うまでもありません。

ルール編 バッターの反則プレー (第92回高校野球選手権兵庫大会より)

1死1塁、ボールカウント1ボール1ストライク、次の投球時に1塁走者は2塁へ盗塁しセーフとなったのに、球審が走者を1塁へ戻したのはどうして?

実はこの時、空振りした打者が前のめりに本塁上へ姿勢を崩しており、捕手の2塁への送球を妨害していました。球審は野球規則6・06の(C)を適用、すぐさま「インターフェア」を宣告の上、2塁での判定後に「ボールデッド」として打者をアウトにし、走者を1塁へ戻したのです。さらに送球を妨害した打者には球審が厳重に注意をして、試合は2死1塁から再開しました。

規則6・06は打者が反則行為でアウトになる場合の規定です。その中の(C)は、打者が本塁での捕手のプレイや守備、または送球を妨害した場合を規定しています。打者(打者走者)や走者は、どんな場合でも相手の守備やプレイを妨害してはいけません。守備優先と考えることが大切です。

メジャーリーグを見ていると、外角の投球を空振りして前のめりになった打者が、当然のように捕手の送球やプレイの場所を開けて元の体勢に戻しています。「相手にプレイをさせよう!」という気持ちの表れです。これこそ「ジャスティス(正義)」ではないでしょうか。

「うまく邪魔してやろう」や「ダメでもともと」のプレイは恥ずかしい行為だとわかっていただけるでしょう。今回の例は、球審が規則を正しく適用するとともに、打者のアンフェアを戒める意味で重ねて注意しました。最後に…、「フェアプレイは技術を向上させる」のです。